

「早成桐」

株式会社榎戸材木店
会長 榎戸正人

戦後植林されたスギ、ヒノキが伐期を迎えています。ここまで成長した森林を間伐すると残された樹木は柱取り丸太としては太くなり過ぎ、さらに二酸化炭素の吸収力も衰えていきます。やはり十分に成長した森林は皆伐して、また新たに苗木を植える必要があります。



タネを蒔いて4カ月でこの大きさ

しかし、ウッドショックで一時的に木材価格が上昇したとはいえ、日本の林業家が潤っているわけではなく、皆伐後に新たに植林する資金も意欲も無くしているのが現実です。そのため、九州などでは森林を皆伐した後にまたスギを植えるのではなく、成長の早い樹種に植え替えて採算性を向上させる動きが出て来ています。20年から25年で成長する樹種に植え替えれば資金回転が良くなるからで、主にセンダンが植えられているようです。

「センダン」と言っても「センダンは双葉より芳し」のセンダンではなく全く別の樹種ですが、住宅の構造材には向かないものの、家具材にはなると言われています。スギの半分の年月で育つ木がスギと同程度の値段で売れてくれば、確かに収益は上がるでしょう。

しかし、世の中にはセンダンの更に2倍以上の速度で育つ樹種もあるのです。それが早成桐と呼ばれる樹種で、なんと苗を植えてから7年で直径が30センチを超えるまでに成長します。元々桐は成長が早

く、江戸の昔からお金持ちの家では女の子が生まれると庭に桐を数本植えて、将来結婚が決まった時に伐採して桐たんすを作り、嫁入り道具として持たせることが行われていました。



早成桐はその中でもズバ抜けて成長が早く、江戸末期に日本に西洋医学を伝えるため来日したオランダのシーボルトが、こんなに早く育つ樹種があるのかと驚き、帰国する際にその種を持ち帰り、育てた苗を街路樹として植えたとされています。春には良い香りのする白い花が咲く桐の街路樹は当時のオランダ王妃にも好まれたということです。

その種を逆輸入し、当時の女王の名を取ってアンナ・ポローニアという樹種名を付けて全国に普及させようとしている会社があります。ペレットストーブやペレットボイラーの輸入販売を手掛けている企業で、自らもペレットの製造、販売をしており当初はその材料用にと考えたようですが、二酸化炭素の吸収力がスギの10倍と言われることから、地球温暖化防止の切り札として全国に植林を広めようと思いついたそうです。

しかしペレットや燃料用チップより付加価値の高い利用方法はないかと私のところに相談に来ました。次回、伐採したら丸太を数本送って頂くことにしています。製材してみないと、何に使えるかわかりませんので。

2メートルの直材が取れば、まず作りたいのは羽目板。軽いので賃貸マンションやアパートの壁に釘などで止める必要はなく、強力な両面テープで十分固定できると思います。安いうえに調湿効果に優れていて防音効果も高いので、ヒット商品になるでしょう。

次に作りたいのは、下駄やサンダルです。桐と言えば下駄が軽くてはきやすいので、昔から定番商品。当社には数値制御で木材をカットしたり溝を掘れるNCルーターと言う木工機械があるので、下駄やサンダルの形に板を切り抜き、裏側の菌やかかと部分を残して加工することができます。一度に20足くらいは加工できるので、安い価格で販売できると思います。

色々な可能性を秘めた素材だと、期待に胸を膨らませています。